

ITP-EUROPA 派遣報告書

マドリード自治大学

葛原亮

2013/05/25-2014/01/31

研究概要

本派遣中には、スペイン語における総称性に関する意味論・語彙意味論的研究を進めた。総称性の持つ性質を記述するために、まずスペイン語の各時制形と総称性を表すと考えられる副詞の共起関係を重点的に観察した。特に、未来形、過去未来形、点過去形は総称性の副詞との共起関係が極めて厳しく制限されるが、この点を特に重視した。この共起が制限される理由を考察することで、総称性の持つ性質を浮き彫りにすることができる考えたためである。

派遣後半には、後述する学会、*Formas simples y compuestas del pasado en el español y en otros idiomas* にて寄せられた助言を取り入れ、名詞化した動詞の分析も行った。分析対象となる動詞の持つ総称性が、その動詞が名詞化された時にどのように変化するのか、あるいは変化をせずに保たれるのか、という点を観察していくことで新しい角度からスペイン語における総称性を分析することができる考えた。

研究成果

以下で、本派遣中の研究成果を紹介しながら、より具体的に先に述べた研究について報告したい。

論文 査読付き

Tsutahara, R. (2013). On the Compatibility of the Spanish Future Form and Habitual Adverbs. *Procedia-Social and Behavioral Sciences*, 95, pp.203 - 210.

すでに述べた通り、時制を切り口にスペイン語の総称性を記述することを目指してきた。本稿では、スペイン語の未来形と総称性の副詞（特に習慣を表すもの）の共起関係について分析した。

当該の時制形と副詞の共起は基本的に制限されている。しかし、共起は全く不可能というわけではなく、共起例は散見される。本稿では量的な分析を行うために、大規模コーパスを用いて当該の共起例を大量に収集し、実例を観察した。そして、未来形と総称性の副詞の共起制限は前者の持つ不確実性と、後者の事実性の衝突によること、ならびに、未来形によって表される事象が起こる「場」が明示されていれば共起が可能になることを報告した。

学会発表① 査読付き

Tsutahara, R. (2013-SEP). Sobre la compatibilidad de la forma de pretérito simple con los adverbios de hábito. *Formas simples y compuestas del pasado en el español y en otros idiomas*. Universidad de Salamanca.

(「点過去形と習慣の副詞の共起関係について」スペイン語および世界の言語における単純・複合過去形 サラマンカ大学)

本発表では未来形の場合同様、厳しく制限されている点過去形と習慣の副詞の共起関係を分析した。本発表ではまず、共起が制限されるのは、点過去形を持つ極めて高い完了性のアスペクトと、総称性の副詞の未完了性のアスペクトの衝突によることを確認した後、動詞句の意味的性質によってはこの衝突が回避され、共起が可能になることを報告した。また、過去の習慣、総称性について述べるための表現形式はスペイン語には数多くあるのに、何故、「敢えて」点過去+総称の副詞という生産性の低い構文が使用されるのかという問題についても触れた。

学会発表② 査読付き

Tsutahara, R. (2013-OCT). Sobre la clasificación de las expresiones de hábito en español. *XXVIII Congreso Internacional de la Asociación de Jóvenes Lingüistas*. Universidad de Navarra.

(「スペイン語における習慣表現の分類について」第28回国際若手言語学者学会・ナバラ大学)

これまではスペイン語の総称文として、動詞+総称性の副詞という構文を中心に扱ってきたが、実際にはスペイン語では動詞が単体で総称性を表すケースや、助動詞によって総称性が表されることもある。本発表ではこれまでに分析してきた副詞型の総称文と、動詞単体型、助動詞型の総称文の表す総称性の共通点、差異について論じた。

学会発表③ 査読付き

Tsutahara, R. (2014-Jan). Sobre el significado léxico-semántico de los sufijos “-dor” y “-nte”. *XLIII Simposio de la Sociedad española de Lingüística*. Universidad de Castilla y la Mancha.

(「接辞-dor, -nteの語彙意味論的意味について」スペイン言語学会 カスティージャ・イ・ラ・マンチャ大学)

本派遣後半より、学会発表①の際に出席者から提案された、名詞化された動詞の総称性の分析も開始した。スペイン語では英語同様、動詞に接辞を付加することで、動詞は

名詞化する。名詞化された動詞の持つ総称性を分析する準備段階として、名詞化を引き起こす接辞の分析も行った。それを取りまとめたのが本研究発表である。

今後の課題

今回の滞在では動詞の相称性を記述する際に、動詞の名詞形に焦点をあてることが有用であることがわかった。今後は今回の滞在当初から取り組んできた法・時制と総称性に関する分析を引き続き進めつつ、動詞の名詞形についても考察していきたい。

具体的には、まず、学会発表③で発表した方向性で動詞を名詞化させる接辞についてより知見を深めたい。学会発表③の結論を別の見地から検証した調査結果を14年度6月にドイツで行われる学会、*Semantics of Derivational Morphology* に提出しており、すでに採用されている。そこで得られるフィードバックを取り入れ、学会発表③と併せて、本研究でどのように名詞化接辞、動詞の名詞化をとらえるのをまず明確にしたい。

その後、Alexiadou, A., & Schäfer, F. (2010)¹等で示された方法論を参考にしながら動詞の名詞形における相称性を分析する。

このようにして、動詞の法・時制形との共起関係、動詞の名詞形など、様々な切り口から多角的にスペイン語における相称性を分析・記述し、その結果を取りまとめ、2016年度に博士論文として提出することを目指す。

¹ Alexiadou, A., & Schäfer, F. (2010). On the syntax of episodic vs. dispositional-er nominals. *Nominalizations across languages and frameworks*. Berlin: Mouton de Gruyter, 9-38.